

2013年5月18日 大阪いずみ市民生協 宮城県復興支援・交流ボランティアバス

宮城県漁協志津川支所のメカブ削ぎ作業を 大阪いずみ市民生協がお手伝い

●志津川支所のカキ処理場を見学

大阪いずみ市民生協は、震災後何度もバスで被災地を訪れ、炊き出しや土のうづくりなどのボランティアを行なっています。昨年からは、より大阪らしい企画をと「タコ焼き交流」を始めました。

2013年5月17日・18日は組合員19人と職員2人が「ボランティアバス」で石巻市、女川町、南三陸町を訪問し、18日には、南三陸町志津川を訪問。袖浜（そではま）地区で、宮城県漁協志津川支所のメカブ削ぎ作業のお手伝いをしました。

大阪いずみ市民生協と宮城県漁協志津川支所の

縁は、11年6月のボランティアバスが始まりです。組合員活動部の中村夏美部長（取材当時）は「南三陸町のボランティアセンターに飛び込みで行って1回目は写真の洗浄をお手伝いしました。2回目に行ってくださいと言われたのが偶然にもみやぎ生協の産直先である志津川支所でした」と振り返ります。まだがれきも片付かないなか、ボランティアバスの参加者たちはカキ養殖棚の土のうづくりに汗を流しました。その後何度も南三陸町にボランティアバスを走らせ、がれき撤去やワカメの芯取り作業などをお手伝いしています。また今年3月には志津川支所の生産者を大阪に招き、交流会を開催しました。

18日朝、一行は昨年10月に完成したばかりの志津川支所カキ処理場を訪問しました。「先日はお招きいただきありがとうございます」と出迎えてくれたのは、カキ養殖部会の遠藤勝彦部会長と志津川支所の菅原茂課長です。「作業の前にカキ処理場を」と案内され、カキ剥きの様子を見学しました。剥いたカキの水洗い作業、硬いカキ殻から実を外す作業。流れるようにカキが処理されていきます。「カキ処理場の完成で140人～150人の雇用の方ができました。町の復興に貢献できていると思います」。遠藤部会長の言葉が明るく響きました。

●ボランティアバスでつながったご縁を大切に

次に向かったのは袖浜地区です。防潮堤そばの作業場で生産者がメカブの処理をしていました。

「メカブの収穫は今終盤に入っていて、生産者もピッチをあげています。大阪いずみ市民生協さんにはちょうど良いタイミングでお手伝いに来ていただいて、助かりました」と菅原さん。一行はさっそくメカブ削ぎの小刀を借り、作業を始めました。

メカブはワカメの根。茎と葉を専用の小刀で切り分け、別々のカゴに入れていきます。ツツと削いでいくだけの作業ですが何しろ量がたくさんあり、次から次へとカゴが運ばれてきます。そこは大勢のパワーの見せ所。「こんな面白い作業がタダでできるなんて貴重ですよ。きれいに切れたら快感です」と福原



志津川漁協のカキ処理場を訪問する
大阪いずみ市民生協の一行と対面する
カキ養殖部会の遠藤勝彦部会長（右端）。

完治さん。高村京子さんも「メカブとか普段何気なく食べているけれど、これだけ人の手がかかっているんですね」と熱心に作業を進めていました。

昼はタコ焼きとカキ汁で交流会。タコもカキも志津川産です。生産者の中に一人タコ焼きづくりの上手な人がいました。「震災後にタコ焼き屋を始めたんです」と話す渡辺直子さんは普段は海の仕事をし、復興市などイベントの時だけタコ焼きの屋台を出すのだそうです。「この人プロだものー」の声に大阪いずみ市民生協の一行もじっと手元を見つめます。

「本場の味は美味しいね」と菅原富士子さん。「泣いても仕方ないので前を向いて生きていきます」と明るく微笑みました。遠藤美子さんは「大阪いずみ市民生協さんは何度もお見えになっているので、顔なじみの方が何人かいます。手紙や電話で連絡をくれて友だちになった人もいますよ」。そういう遠藤さんの友だちになったひとりが、大阪いずみ市民生協の小倉美子さんです。「まったくご縁がなかった志津川に友だちができた。震災がなかったらつながることは無かったと思うと複雑ですが、だからこそ大事にせなあかんと思っています」と話してくれました。

大阪いずみ市民生協の取り組みに、遠藤部会長は「人としての温かさを感じる」と言います。「旧知の間柄のように接していただいている。いつも“何が必要ですか”と心を寄せてくださって感謝の言葉しかありません」。

◆復興への思いを新たに大阪へ

午後、一行は2隻の漁船に乗って湾内へ。一隻は今年1月に進水式を行なったばかりの「かねた丸」です。船は個人所有ですが、漁協の方針で復興のため5年間は共同利用することになっています。30代の小野具大さんは、震災を機に志津川に戻り、漁業を継ぐことにした期待の若手。機械を操作してカキを水揚げします。そのカキを、カキ養殖部会の行場博文副会長がその場で剥いてご馳走してくれました。たっぷりと美味しく育ったカキは復興の象徴です。「2年でここまで来



メカブ削ぎも徐々に上達？



震災後にタコ焼き屋を始めた渡辺さん、大阪いずみ市民生協の一行も手元を見つめて感心。



「かねた丸」へ乗船し、養殖カキの水揚げ作業を見学。

れるとは予想もしてませんでした。皆さんのおかげです」。菅原課長の言葉は生産者共通の思いに違いありません。

ボランティアバスの参加者も復興への思いを新たにしていました。「カキ処理場ができ、女性の生産者も戻ってきた。ここまで復興するとは思わなかった。他の地域もこうあってほしい」(杉本誠三さん)。「ご家族を亡くされた小野さんが志津川に戻ったと聞き涙があふれそうになりました」(柴田知美さん)。「帰ったら写真を家族に見せて、被災地は今こうなんだよと伝えたい」(高田昭さん)。

得るものが多かったボランティアバス。「これからも年6回岩手・宮城・福島にボランティアバスを出そうと思っています」と中村部長。合わせて委員会や機関誌を通じて、ボランティアバス参加者の声や被災地の情報を発信していきたいと話していました。



養殖しているカキを試食し、復興を実感。